

久留米絣産業における

ニーズ変化への対応

1158056
白桃若菜

1、はじめに

現在、日本には衰退の著しい伝統工芸品産業は多い。その衰退の原因として、消費者嗜好の変化、産業構造の変化等を含む外部環境の変化が挙げられる。

久留米絣も著しい衰退がみられる可能性のあった伝統工芸品産業の一つであった。しかし同じような外部環境にあって、久留米絣は伝統工芸品産業の中でも再活性化を果たしている。伝統工芸品産業の成長、維持、衰退をもたらす要因とは何か。

今後の伝統工芸品産業の振興のために取るべき方策について、久留米絣の事例研究をもとに検討する。

2、久留米絣とは

久留米絣は、福岡県南部の筑後地方一帯で製造されている絣。生産されているもののほとんどは着尺の綿織物。織幅が1尺の織物。括りおよびよばれる技法であらかじめ染め分けた糸を用いて製織し、文様を表す。伊予絣、備後絣とともに日本三大絣の一つともされる。久留米絣の技法は1957年に国の重要無形文化財に指定され、1976年には経済産業大臣指定伝統工芸品に指定されている。



3、調査課題

かつて久留米絣は着物地として生活必需品であったが、消費者嗜好の変化、産業構造の変化等を含む外部環境の変化により衰退してきた。しかし、現在では洋服地として独自のブランドを作り出し、再活性化した伝統工芸品産業の代表例の1つとなった。分業体制の観点から、久留米絣が再活性化した要因を明らかにしていきたい。

4、調査結果

(1)生産形態の変化

昔は織元が作りたい図案を図案師から買い取り、その図案を織って問屋に売っていた。しかし、現在は図案師から織元が買い取った図案の中から、問屋が指定し、必

要な分だけ織元に織ってもらい、すべての絣を買い取るという形に変化した。問屋が図案を指定するといっても、すべてを問屋が決めてその通りに織元が織るのではない。問屋と織元で打ち合わせを行い、その中で織元は色の提案や技法の提案を行い、その打ち合わせを通して問屋が織元に図案を指定する(富久さん, 2017)。

(2)手織機と動力織機



手織機



動力織機

久留米絣には手織機と動力織機がある。24件の織元があり、11件が動力織機のみ、13件が手織機のみ、2件が動力織機と手織機の両方を使用している。富久織物には2種の手織りの織機があり、手織機を使用するのは年1回、重要文化財を作るときのみである。手織機は各工房で購入するのではなく、久留米絣保存会が所有している15~16台の織機をレンタルして使用している。

動力織機は、100年前にトヨタ織機という会社から販売されたものを現在も使用している。

5、考察

生産形態の変化からわかるように、昔は織元が織りたいものを織っていた。しかし、問屋の指定で織元が織るという現在の生産形態に変化したことによって、消費者と接している問屋の意見が反映されるように変化した。したがって、問屋はより顧客のニーズに合った商品作りをすることが可能になった。このことより、織元には問屋の要望に対して忠実に絣を作るという柔軟性が求められ、問屋には顧客のニーズをつかむということが必要になったと考える。

また、織元・問屋それぞれの役割が明確になったことにより、顧客のニーズをつかむことができ、再活性化を果たすことができたと考えられる。

6、参考文献・インタビュー情報

- ▷『久留米絣とは』久留米絣織元 下川織物
<http://oriyasan.com/kasuri/>
- ▷富久織物 富久 洋さん
2017年7月9日 10:00~11:30
- ▷西原糸店 西原 健太さん
2017年7月9日 14:30~16:00

この研究を遂行するにあたり、インタビューに協力してくださった富久洋氏、西原健太氏、本当にありがとうございました。